

# ひらやま

## 五号

※ 今月は新聞掲載作品です。どうぞご覧ください。

「弟とてもすごい」

六年

柏田 莉子

私には5さいになる弟がいます。私が1年生の時に生まれました。あんなに小さくて泣いてばかりだつた弟が、今では私のむねの高さまで背がのびて、言葉もたくさん話せるようになりました。私とけんかをしても、負けずに言い返すようになりました。

そんな弟が、この前5さいのたん生日をむかえました。そのお祝いに家族でサークルに行きました。サークルの入口では、大車輪の体験がありました。私が、「乗りたい！」と言うと、弟も「乗りたい！」と言つて、私のあとをついてきました。

直前になると私はこわくなつて、並んでいた列からなれてお母さんのところへ戻りました。でも弟は、

全然こわがらずに列に並んでいました。いよいよ弟の

順番がきて乗つたとたんにこわくなつたみたいです。ずっと「降りたい！」と言つて泣きそうになつていきました。でも、体験のと中で降りることはできないので、最後まで泣かずに乗ることができてとてもすごいなあと感心しました。



「まいごのかぎ」を読んで

三年

森本 勇雅

「ぼくはこのお話が好きです。なぜかといういろいろな出来事がおきておもしろいからです。バスがくるくるまわつたりベンチが大きな犬の様に動いたり。いろいろあつておもしろいです。ぼくが、好きなのはあじの開きにかぎあながある場面です。とくにすきな所は、あじの開きが小さいかもめのようにはばたくというところです。

なぜかというと、そんなことがりえるわけないのに、このお話ではあるというところです。そもそも、このお話は、ぜつたいにげんじつでおこらない出来事がおきています。それがこの話のとくちようです。四十六時八百七分という数字が出て来るのがすごくおもしろかつたので、もつと読んだりして、このお話しのいいところを見つけたいです。

学園俳壇

水たまりぽたんぽたんと歌つてる

五年

戸高 夏海

